

職業と技術の教育に関する研究ということ

寺田 盛紀

小生など、標題のような深遠なことを書く資質も未だ遠しなのであるが、研究室紀要「職業と技術の教育学」の姉妹編としての本「研究報告」の誕生に際して、とくに若手研究者といわれる人たちに短文を贈ってみようと思う。とくに、前者が内外に開かれた準学会誌を目指し、本誌がおもに研究室の若手研究者の成長を促進する研究誌として位置付けたいからである。

この分野の研究にとっていったいなにが重要なのか、よくよく考えてみると、思想や方法論のちがいはあっても、つまるところ、「職業や労働、そして技術」という実際の、世俗的ことがらにその研究者がほんとうに愛情（人間発達可能性）を感じているのか、ということであるように思う。著名な教育思想家たちが、つねにその問題をみずからの思索課題にしてきたにもかかわらず、研究者といわれるひとたちや東洋社会、儒教的社会にいきる人々はあまりそのことを前向きにとらえず、経済・社会のためにやむをえず行う教育という程度にとらえる傾向があった。そうであると、職業と技術の教育研究もあまり迫力が無く、せいぜい「冷かし」ものになってしまう。

よく職業教育と区別する形で、「普通教育としての技術教育」などともいわれるが、「普通教育としての職業教育」もある。職業や技術などというのは、どこまでいっても社会の中での分業性を追求することであろうと思うが、普遍性は「一般性」からだけでなく、「個別性」からも得られる。いな、むしろそれが大方の人間のすがたではないだろうか。そのことに確信をもってほしいのである。

もう1つ。そのことと関係があるようなのだが、基本的な問題として、研究する諸個人の教育理念とか社会思想、あるいは生活人としての思想形成などというのもやはり重要であると思う。研究をはじめたばかりであまりそのことが出過ぎると、人から引用されるような生産的成果にながらないし、先達から「あなたのいうことは大風呂敷で、そのようなことをいうのは20年早い」と言われかねない。一度は言われればよいと思うのだが、最近の「院生」といわれる人たちには、資料や素材を切る道具があまり鋭くない。M.ヴェーバーが問題にした「社会科学における客観性」

(Wertfreiheit)などは研究者として最低限必須のことであると思うが、なにを問題にするのかという視点や積極的仮説もそれと同様に重要であり、その研究に他人を惹きつける。やや「今の若い人は」式の話だが、とりあえず、この2点は記しておきたい。

私たちの分野は、とくにわが国では、研究者の再生産（養成）機構が十分でない。しかしそのことが幸いして、なすべき課題もたくさん残されている。職業教育の行財政研究、専門教授法研究、就職・雇用への移行過程の研究、技術の教育における技術観や職業観のありかた、旧技術と新技術の相互関連的組織化に関する研究、技術の教育における形式陶冶的側面（問題解決能力や技術的思考力などの問題）の研究、などなど。どんどん新分野を開拓し、この分野の確立・発展に加わるひとが増えることを期待している。

2003年7月17日 ドイツ・デュイスブルグ大学の研究室で